

古代日本史における「史観」の変遷 —百舌鳥・古市古墳群を歩いて—

村上 俊介

2015年度の社研春期合宿研究会は、大阪府、たつの市の地域再生策の種々の試みについての実態調査を目的とした。訪問先は、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録を目指す堺市役所、大阪産業経済リサーチセンター、たつの市ヒガシマル醤油などであった。百舌鳥・古市古墳群見学に関しては、事前研究会と現地案内には、土生田純之所員に大いに協力してもらった。

事前研究会では、土生田所員から、3世紀中頃の前方後円墳である奈良箸墓古墳を画期とする古墳時代について、弥生時代から古墳時代への推移、および5世紀前半の百舌鳥・古市古墳群の特徴（＝王墓築造地の移動・陪塚の存在）と意味（＝同一氏族のシンボル）、権力構造の展開（＝首長連合からその統合と王権の機構化）に関する解説を受け、また現地では大仙古墳（伝仁徳天皇陵）や誉田古墳（伝応神天皇陵）周辺を歩きながら、また立ち入り可能な周辺の古墳内で、説明を受けた。

現地にて、私をもっとも印象深かったのは、この百舌鳥・古市古墳群見学だった。4世紀末から5世紀前半の古墳時代中期、まだ畿内の権力が畿内・西日本などを支配するまでには至っておらず、日本列島のクニグニの権力構造が北部九州、吉備、出雲、紀伊などとの連合体であったらしい段階で、畿内の一地域に小山のような巨大墳墓を築造するだけの動員力・組織力があつたことに、古代の人々のエネルギーを感じないわけにはいかなかった。

私は日本列島の古代史の中で、以前からずっと気になっていたことがあった。それは古代における日本列島と朝鮮半島の交流関係である。弥生時代から古墳時代に、朝鮮半島から数多くの人々の渡来があった。そのとき、明らかに朝鮮半島は先進地域で、日本列島は後進地域であったはずだ。それなのに4世紀中に倭は任那日本府を設置し、5世紀にたびたび朝鮮半島に出兵をして百済や新羅を支配下に置いたと言われていた。それを私は信じられなかった。しかし今回の合宿研究会で、巨大古墳に見て、日本列島から朝鮮半島への古代人のエネルギーの逆流はありえたかもしれないと思うようになった。ただし、どう考えても倭による百済や新羅の支配・経営などは考えられない。だとしたら、どういう交流関係だったのか、やはり疑問は残ったままだった。

私が20代（1970年代）の頃、鈴木武樹というドイツ文学者でありタレント教授（明治大学）がいた。私の手元に今、雑誌『現代のエスプリ』107号（1976年）がある。この特集号「古代の朝鮮と日本」、編集・解説が鈴木武樹のものである。テレビによく出演するタレント教授とし

てしか知らなかったこの人物が、「東アジアの古代文化を考える会」の中心人物で、かつ既成の古代史観に過激な異議申し立てをしていることを知って見直していた矢先、彼は 1978 年に 40 代半ばにして急逝した。古代史研究論文では誰からもいっさい引用されることのない彼の古代史に関する著書のうち何冊かを改めて読んでみると、確かに過激であり、しかし同時に面白かった（鈴木武樹 1975、1976、1977）。そこには当時の既成の古代史観にある、渡来人の日本列島社会に及ぼした影響の過小評価、「任那日本府」による朝鮮半島の支配・経営を既成事実とする視点への批判がたたきつけられていた。私が古代の日本列島と朝鮮半島の関係に関心を持つのは、この記憶のせいである

一般に古代史研究というのは苦勞が多いだろう。まだ「日本」と称する以前の紀元前数世紀から紀元 6 世紀の日本列島の有様を描こうとすると、文献史料は限られていて、8 世紀編纂の『古事記』と『日本書紀』以外では、紀元前 1 世紀の『漢書』、3 世紀末『三国志』のいわゆる「魏志倭人伝」、5 世紀の『後漢書』、5 世紀後半から 6 世紀初頭の『宋書』「夷蛮伝」、それに朝鮮半島側から 12 世紀の『三国史記』や 13 世紀末の『三国遺事』程度。また金石文史料としては 4 世紀のものと言われる石上七支刀や日本国内で出土する文字の入った鉄剣、そして有名な 4 世紀末から 5 世紀初頭のことが刻された広開土王碑くらいである。研究者たちは、これらの分析を組み合わせ、日々発掘・発見されていく考古学調査資料を加えて、できる限り合理的な「推測」でパズルを埋めるように古代史像を描く。

ところで、その推測の背景にあるのは、その歴史像を形作る当の歴史家の「史観」あるいは現代における社会観・思想であろう。だからそうした社会観を共有するグループの違いによって歴史像は異なる。それは多分、学派ということになるだろうが、単なる古代史の一読者としては、この部分は分からないので何も言えない。他方、提示される歴史像は時代によって変化する。この時代による古代史像の変遷くらいなら私にも観察できる。その変遷を辿りながら、上記の私の疑問について考えてみたい。

1960 年代の日本古代史像

1965～67 年に中央公論社『日本の歴史』が公刊され、長きにわたってベストセラーとなった。第 1 巻「神話から歴史へ」は、井上光貞の執筆である。以下、その概略を追う。

井上は言う、「弥生式文化を構成する種々の要素は、ほとんどみな南朝鮮—対馬—北九州の経過で伝わったことはほぼ確実だが、縄文時代人は、それをうけいれるだけの力をもっていたのである。これらの新しい文化は若干の（下線筆者）移住者によって海の向こうからもたらされた可能性が大いにあるが、その人たちもやがては縄文時代人に体質的に同化され、日本人全体

が弥生式文化へと進んでいったのであろう」(176) ということで、弥生中期の銅剣や銅鉾などの武器類はそうした「日本人」の族長が朝鮮半島の族長たちと「かなり深い交渉」を持ち、「輸入」したものだとのことである。ちなみに、弥生時代は紀元前4、5世紀から紀元3世紀中ごろまでと言われているが、2003年に国立民俗博物館が、始まりは「それより約500年遡る」と発表して以来、賛否両論の議論が続いているらしい(石川比出志 2010)。

井上は、この北九州の勢力が弥生後期に畿内に勢力を移し(東遷説)、力を蓄え、4世紀後半から朝鮮出兵と国土統一を並行的に進めたという。彼は『日本書紀』に引用されている『百濟記』と、広開土王碑文に依拠して、大和政権が畿内を拠点に4世紀中葉から百濟と結んで朝鮮半島に軍事進出をして、朝鮮南部に「任那日本府」の基礎を築き、4、5世紀の転換期に頻繁に高句麗、新羅と戦ったというのである。この歴史観はすでに1960年『日本国家の起源』(岩波新書)にあり、とりわけ朝鮮出兵が朝鮮南部の鉄資源の独占、「帰化人」の日本土着、彼らによる農工生産技術の革新、それらによる日本国家の誕生への大きな役割の指摘がそれである。彼の倭による朝鮮支配史観はその後も牢固として変わらない。

このような対朝鮮半島に関する史観は、1960年代においておおむね共通している。1962年版『岩波講座 日本歴史1』では、まず弥生文化発生について、近藤義郎「弥生文化論」では、「弥生文化はすでに成立のはじめから、水稲耕作・金属器・大陸系磨製石器群・織物技術などの新しい各種の文化要素をそなえて」(近藤義郎 1962、144頁)おり、縄文文化からの「高度な技術の採用や基本的というべき習俗の転換」あるいは質的飛躍があったことを指摘しながら、そうした現象はしかし「渡来移住こそが弥生文化の成立を導いたとただちに推定することは慎重を欠く」(同 144-145頁)という。その論拠は、北九州の板付遺跡で、縄文式土器=夜臼式土器と弥生式土器=板付式土器が混在して発見され、夜臼式土器に稲籾の圧痕が発見されたことによって、縄文時代の終わりや弥生時代のはじまりが重なっている状態が見られたこと、縄文人の伝統とされる抜歯習慣が弥生人にも時に認められること、それらによって縄文時代と弥生時代の「断絶」ではなく、「移行」が想定される、という点にある。なお、現在では抜歯習慣=縄文文化という等式は相対化されている。

加えて、「かりに新来の人びとをみとめるとしても、それまでまったく交渉のないいわば文化的に異質な集団が突如として北九州から畿内にまで広がり、全地域において斉一的な弥生文化をしかも縄文文化の伝統の上に誕生させていくといった指導性をもちえたであろうか。これは疑問なしとはしえない」(同 154頁)ので、結局、弥生文化は「日本で成立した文化である」(同 144頁)と近藤は主張する。「大陸」(=朝鮮半島)からの強い影響を受けて、縄文文化とは質的に飛躍した弥生文化が、急速に畿内まで拡大していったことと、この弥生文化が日本で成立した文化であることは矛盾しない、と近藤は言うのだが、それよりも朝鮮半島から多くの渡来

人が異質の文化を携えて来たという方が分かりやすすくないか。

つぎに4世紀から5世紀の日本列島と朝鮮半島との関わりについて見ても、古代世界を考察する執筆者には、最初から日本と日本人が確固として存在するかのような無意識のイメージがすでにあって、それをもとに「外国」との関係が組み立てられているようである。

たとえば古墳の副葬品である鏡の分析によって、同じ鋳型で作られた同範鏡の分布関係とその関係網・発生地との考察から、政治的覇権掌握の地を畿内に絞り込む研究を行なって、のちの研究者に大きな影響を与えた小林行雄は（土生田所員も彼のこの業績を次節に組み込んでいる）、多くの古墳副葬品について「もしその製作地が、南朝鮮の百済や新羅であるか、北の高句麗であるかを決定することができたならば、それが購入品であったとか、戦利品であったとかいうところまで、推論をすすめることができるかもしれぬが、それは将来にまつほかはない」（小林行雄1962、271頁）、あるいは新羅・任那などの古墳からも発見される日本の古墳と同じ副葬品（金製耳飾・帯金具・冠・履・馬具など）を、朝鮮から日本への「輸入品」とあるという視点を保持している（同271-272頁）。

さらに「帰化人」について、藤間生大は「日本と朝鮮の歴史の上で、この五世紀から六世紀にかけての時代ほど外国出身の技術者が大きな機能をはたしたことはない」（藤間生大1962、279頁）と述べた上で、「帰化人」とは「みずからの意志で日本にきて、土着を好んでしたかのようにうけとれる内容がある。これは事実こそむく。「帰化人」の内にはそうした人もいるが、「帰化人」の多くは掠奪されてつれてこられたり、大陸の君主の贈与によって日本にきたのである」（同279頁）と述べている。これは4世紀後半から5世紀にかけてのヤマト政権の朝鮮出兵を前提にした「イメージ」であろうが、ここにもすでに確固とした日本国家を前提とした外国人の入国というイメージがある。まだ日本という国もない時代であるにもかかわらず。もっとも彼は悪気があってそう言っているのではなく、「帰化人」は権力の犠牲者だったと言いたいようである。

1970年代の抵抗

このような日本の古代史像が一般に定着しているなか、小説家である金達寿が1970年から「日本の中の朝鮮文化」を公刊し始めた。このシリーズは、雑誌『思想の科学』に連載され、その後、『季刊 三千里』、『労働者の共済』、『韓国文化』などに場所を移しながら、1991年まで足かけ21年間かけて書き継がれ、講談社より全12巻で公刊され、さらに1983年から1995年に、補章を追加して文庫本化された（以下の引用では、発行年は時代の経過を重視して初版年を記すが、引用頁は文庫本による）。

金達寿のこのシリーズは、日本全国の弥生遺跡と神社仏閣を巡り、そこに朝鮮半島からの渡来人の痕跡を見出そうとするものだった。彼のこの仕事に対して、日本の神社仏閣のほとんどすべてが朝鮮半島からの渡来人由来だとすることへの批判もあり、一愛読者としての私自身も地名や固有名の語呂合わせ（何も彼だけのことではないが）には閉口したし、なによりも、とりわけ神社がほんとうに古代渡来人の拠り所だったのかどうか、ということが感覚的によく理解できなかった。しかし2011年に機会を得てベトナムの一農村（ナンディン省ザオタン村8,200人）を訪れたとき、村に一つある農村開祖の祖先廟のほか、この小村を構成する大小84の同族者集団が競い合うように固有の立派な「廟」を持ち祀っているのを見て、金達寿の次の言葉がやっと腑に落ちるようになった。「日本の古代における神社というものは、それ自身一つの独立国であった。「氏神」「氏子」ということばが、いまなおそのことをよく伝えているのであるが、たとえばここに一つの氏族があって、自分の村国に祖神を祭る神社を祭ると、今度はその支族がまた別なところに村国をつくってその神社を祭る、というふうではなかったかと思われる」。(金達寿1972・第3巻、76頁)

そうした留保は別として、金達寿が日本の古代史研究に対して端々で吐露する異議申し立てについては共感するところが多かった。彼はシリーズ冒頭の前書きで次のように述べる。「これまでの日本の歴史では、まだ「日本」という国もなかった弥生時代の稲作とともに来たものであろうが、古墳時代に大挙して渡来した権力的豪族であろうが、これをすべて朝鮮を「征服」したことによってもたらされた「帰化人」としてしまっている。ここにまず一つの大きなウソがあって、今日なお根強いものがある日本人一般の朝鮮および朝鮮人にたいする偏見や蔑視のもととなっているばかりか、日本人はまたそのことによって自己をも腐蝕しているのである」(金達寿1970・第1巻、3-4頁)。

その傾向は「進歩的といわれていた歴史学者たち」ですら同様であり、彼はその一例として、上記に私がすでに紹介した『岩波講座 日本歴史1』所収、藤間生夫の帰化人論を引用し、それに続けて「こういうふうであったから、私はもう日本の歴史と歴史学とには、ほとんど絶望してしまっていた」(金達寿1972、第3巻、同127-128頁)と憤慨した。

すでに「帰化人」の古代日本列島社会に果たした重要な役割を明らかにしていた上田正昭ら、金達寿が共感する日本の古代史家もいるにはいる。しかし弥生時代から古墳時代にかけて、朝鮮半島からの渡来人が果たした役割を意識的に見ないようにして、遺跡出土品を「大陸」からの「戦利品」・「輸入品」と書く古代史研究や新聞記事の傾向を彼は憤りを込めてつぎのように論じる。「『物』の背後にある『人』の存在を見落としている」こと、これはなにも誰それと限ったことではない。これまでの日本古代史学全体がそうであるといっても、決して過言ではない。「文化の伝来」とか「文化の伝播」などといったことばなどにもそういった意味が含まれてい

て、まるでその「文化」だけがひとりのこのことやって来たか、あるいは風に乗った種子かなにかのようにして飛んできた物でもあるかのように考えられている。そうでなければ…ありもしなかった「大和朝廷の朝鮮経略」戦争によって、それがもたらされたものであるかのようにみられている（金達寿 1973、第 4 巻、32-33 頁）。この「当時、それを輸出する商社などなく、その伝来とはそれを持った人間の渡来だ」というフレーズは金達寿の十八番であり、シリーズの中で繰り返される。

一方、「帰化人」、「先進技術・モノの伝来」と不可分の関係にある「古代における日本列島の側からの朝鮮侵略・支配・経営史観」に関しては、金達寿は 1972 年版高校教科書『新日本史』をやり玉に挙げて、「この『新日本史』の著者は「教科書裁判」で有名な家永三郎氏である。反体制的と政府のほうからはみられているその家永氏にして、古代の部分はこれであるからあとは推して知るべしというものである。だいたい、日本の史家たちがこぞってこのように書いているその根拠はいったい何であろうか。…広開土王陵碑文にはほかならない」（同 41-42 頁）という。実際、ヤマト政権の朝鮮侵略というイメージの根源は『記紀』の無批判な解釈だろうが、その唯一無二の「物的証拠」は今も昔もこの広開土王碑文である。金達寿の『日本の中の朝鮮文化』シリーズ第 4 巻の書かれた 1973 年ごろは、1971 年に中塚明、1972 年に佐伯有清、次いで李進熙の広開土王碑研究が雑誌に発表され、とりわけ相次いで出版された李進熙の広開土王碑研究（李進熙 1973、同 1974）が、学界を揺さぶっていた時期であり、金達寿もこれにいち早く呼応したのだった。もっとも現在は李進熙の戦前の陸軍参謀本部将校による碑文改ざん説はなかったと一般了解されているようで、古代研究者は李進熙以前と同様、安んじてこれを利用している。

これに呼応したのが先述の鈴木武樹だった。もともとドイツ文学者である彼は、古代史関係の市民運動として 1972 年末に「東アジアの古代文化を考える会」を立ち上げた。この活動と内部抗争（それによって鈴木武樹が追い出される）の顛末については、『古代史の魅惑と危険』の「解説」中で友人原田三朗が詳しく紹介している（原田三朗 1977）。さらに 1975 年『偽られた大王の系譜』、1976 年『消された「帰化人」たち』、そして 1977 年『古代史の魅惑と危険』と立て続けに古代史関連の意見を発表し、規格外れの「疾走」の末、1978 年にわずか 43 歳で急逝した。

彼が一連の著書の中で主張するのは次のようなことである。(1)『記紀』にのみ依拠した既成古代史の、最初から「日本」があってそれが歴史的に発展してきたかのような叙述（それを鈴木は「ネオ国学者」による「皇国史観」と呼ぶ）への強い批判、(2) しかもその「日本」の視野に、アイヌ人、琉球人、渡来人はいないかのような叙述への批判、(3) なかでも渡来人について、その古代に及ぼした影響の大きさを意識的・無意識的に避けようともしているかのよ

うな叙述への批判、これである。これはまったく正しいと思う。

もちろんこれらの既存の古代史研究への批判や、『古代史の魅惑と危険』で中・高校教科書を取り上げて、それを執筆した「ネオ国学者」の歴史観を叩くやり方も、すでに金達寿や李進熙が行なっていたのであり、その点では彼の独自性はない。しかし日本人がそれをやったということに一つの意味があった。しかも鈴木は、家永三郎と対談して、その教科書に見える古代史観を面と向かって逐一批判したり、井上光貞に対し「公開質問状」や「闘争宣言」（鈴木武樹 1977）を表明するなど、批判のやり方は激烈であった。

ちなみに、李進熙は『広開土王碑の謎』の文庫本「序」で、家永三郎の昭和 48 年（1973 年）高校教科書『新日本史』（三省堂）と、昭和 52 年（1977 年）改訂版を比較し、後者には、任那日本府という言葉がなくなり、広開土王碑の内容と、それに基づく大和政権の百済・新羅服属に関して、「近年の学界」でいずれも意見が分かれていると記されていることを指摘し、教科書における古代史観の変化に読者の注意を促している。私もまた、李が言うように、そこに、あるいは鈴木武樹の対談に応じる「家永氏の真摯な姿勢」を感じる。

なお 1972 年には井上秀雄が著書『古代朝鮮』のなかで個性的な古代史イメージを打ち出していたことも付言しておこう。井上は 3 世紀『魏志』韓伝の「韓は帯方郡の南にあって、東西は海であり、南は倭と接している」という記述から、当時の中国からは「倭」が朝鮮南部の一地域と見なされていたと解釈し、これを広開土王が戦った新羅と地続きの地域＝「倭」であるとされた。彼によれば、仮に何の疑いもなく「倭」とは日本のことであるとする者に対して、「倭が高句麗広開土王の五万の大軍と数度にわたって戦い、五世紀だけで一七回も新羅と戦わなければならない理由や、海流の激しい朝鮮海峡に大軍を渡航させる方法などが、当時の北九州の倭国や大和朝廷にあったのであろうか。任那日本府という、史料にもない幻の日本府を造作するのではなく、まず、それぞれの史料に即して新羅人が用いた倭（任那地方の別名）を再検討するとともに、古代の日本史・朝鮮史の再構成をはからなければならない」（井上秀雄 1972, 153-154 頁）と詰問した。どうもこの見解は、日本の古代史学界からは異端視されているようであるが、実際のところ、4 世紀末から 5 世紀初頭の倭の大軍が海を渡り高句麗や新羅と戦うほどの力について、私も疑問に思っていたから、井上の説は、一つの史観として興味深く読んだ。少なくとも井上の思想は、同時代の鈴木武樹らの思いと共鳴するものだった。

1970 年代－2000 年代の日本古代史像の変化

1970 年代になって、旧来の史観に対して、古代研究者の「外部」から揺さぶりがあった。ではその後は変化したのだろうか。1975 年版の『岩波講座 日本歴史』を見ると、かなりの変化

がうかがわれる。

まず弥生人の起源について、日本列島の縄文人が自ら弥生人になったというイメージが揺らぎ始めた。縄文人自らが弥生人になったという議論の論拠は、縄文人の稲作を推測できる縄文土器への粃痕付着と、弥生式墓制による墓から縄文文化の一つである抜歯習慣を示す頭骨が発見されたこと、この二つであった。佐原真は、縄文土器への粃痕付着をもって、縄文人自らが弥生人になったという議論には距離を置き、「すくなくとも晩期の縄文人が米を知っていたことは確実である」が、「弥生文化形成に一翼をになった大陸の人びとが、大挙して渡ってくるのに先だって、九州に渡航して米をもたらした可能性も十分にある。また、弥生時代に入った頃、周囲の縄文人が弥生人から米を入手した可能性もある」（佐藤真 1975、第1巻 122 頁）とする。また彼は、弥生式墓制の墓からの抜歯頭骨の存在については、弥生人と縄文人の混血による日本列島への弥生文化伝播の一例と見なしている。彼は弥生人をそのまま外部（朝鮮半島）からの渡来人だと見なしているわけではないが、弥生時代に多数の人が稲作技術を携えて朝鮮半島から渡来したことは認め、縄文人との混血しつつ日本列島に弥生文化が伝播されたというイメージを提示している。

さらに日本列島における権力・国家形成期に関しては、このシリーズの「序」を担当した直木孝次郎が、通説の再検討を強く求めている。この直木孝次郎は 1965 年版『岩波講座 日本歴史 1』の中で魏志倭人伝解説を中心とした論稿「国家の発生」を書き、1962 年中央公論社版『日本の歴史 2』「古代国家の成立」を執筆したその人である。飛鳥時代が中心となるこの中央公論社版『日本の歴史 2』の中で、彼は、「四世紀以来、大和朝廷は朝鮮半島の百済・新羅を勢力下におき、任那には、のちに日本府とよばれる出先官庁をおいて属国のように支配していた」（直木孝次郎 1962、26 頁、引用頁は 1973 年初版の文庫本より）と述べて、この点では基本的に井上と史観を同じくしていた。その彼が、1975 年版『岩波講座 日本歴史』の中では「旧説」を再検討すべし、と力説しているのである。すなわち彼は 6 世紀を古代国家成立期と設定し、それ以前を過渡期として三つの時期に分ける。第 1 が弥生時代後期の階級分化（卑弥呼の時期）、第 2 が 3 世紀末ないし 4 世紀初めから始まる古墳時代前期でヤマトに強力な首長登場、第 3 が 4 世紀末ごろから始まる古墳時代中期で応神・仁徳の時期。とりわけこの第 3 の時期について、「この時期の文献・金石文にはなお疑問の点があり、また朝鮮に「侵入」した倭人も、かならずしも大和政権の派遣軍とは断定できないことや、大古墳の造営時期にも問題のあることが指摘されている。旧説の再検討は必要であろう。この時期における朝鮮系渡来人の問題についても同様である。その多くが、はじめから大和政権に服属するものとして一掃化のために一来日したように記している『記』『紀』の伝承は、そのままには信じ難い」（直木孝次郎 1975、13-14 頁）と述べて再検討すべきことを強く求めた。

これに呼応するように、同巻のなかで、平野邦雄は『日本書紀』と、その中に引用された朝鮮側文献『三国史記』とを比較し、四世紀末から五世紀初頭における朝鮮三国と倭との関係を考察している。鈴木武樹が『記紀』だけに依拠した古代史学を批判（『偽られた大王の系譜』序文）したことへの、返答のように見える（平野邦雄 1975）。

さらに 1975 年版『岩波講座 日本歴史』第 2 巻では、吉田晶は「任那日本府」について、その存在そのものを否定するわけではないが、それが倭による朝鮮南部の領土であったとするイメージを否定した。すなわち、倭国にとって「加羅地域は海を距てて異種族の居住する地域であり、両国（百済と新羅…倭）のように古代国家形成にあたって必然的に領土的併呑を必要とする地域ではない」（吉田晶 1975、54 頁）のであり、「倭国にとっての日本府とは、加羅諸国のもっている政治的秩序と機関を利用して、先進文明・文化を一元的に受容するための組織だったのである。右のような日本府は、加羅諸国に対する統治機関でなく、ましてや軍政機関でもなかった」（同 56-57 頁）、というのである。

私にとって興味深かったのは、倭の朝鮮半島への出兵があったとしても、それは「それは一般的には先進種族に対するバルバロイの侵入という歴史的内容をもつ」（同 54 頁、下線筆者）という彼の見解であった。私の狭い読書範囲の中で、同時期を扱った朝鮮史家 梶村秀樹の一言 — 「未開の蛮族がそれゆえに機動的な軍事力たりえ…」（梶村秀樹 1977、53 頁） — の他に、それまで見かけることがなかった言葉なので印象に残った。

こうした変化はさらに続く。一つは 2000 年から公刊が開始された講談社『日本の歴史』、もう一つは 2002 年からの吉川弘文館『日本の時代史』である。講談社『日本の歴史 1 縄文の生活誌』は、その刊行直後に、旧石器遺跡ねつ造事件が発覚し、その張本人とごく親しい協力関係にあったのが、この第 1 巻の著者岡村道雄だったため、すぐに絶版になり 2002 年に改訂版が出されるという因縁付きのシリーズだった。改訂版で岡村は長い「補章」を加え、事件の顛末と反省を記している。ここでは主に第 2・3 巻を扱うが、それを支える史観は、1975 年版『岩波講座 日本歴史』と同じ地平にあると思える。

まず縄文人と弥生人の関係に関して、第 1 巻の著者である岡村道雄は、縄文時代を明るく、その文化を豊かに描くという全体のトーンからして、縄文人が少数の渡来人の影響を受けて自ら弥生文化を形成したのであって、「弥生人」はどこからも来なかった」（岡村道雄 2002、273 頁、引用頁は 2008 年初版の講談社学術文庫より。以下同様）と述べるのは予想どおりである。しかし第 2 巻「王権誕生」を書いた寺沢薫は、「縄文人から弥生人への形質変化は環境によるゆっくりしたものではなく、渡来人との混血による急激な変化であったと考えられている」（寺沢薫 47-48 頁）、と述べ、しかも両者の関係はいたって平和共存的だった、という。平和共存であったかどうかは知らないが、少なくとも朝鮮半島からの渡来人が弥生文化形成の大きな主体で

あったことは認めている。

第3巻「大王から天皇へ」を書いた熊谷公男は「任那日本府」について、「カラに対し、「任那」はおよそその対極にある語であり、倭王権の独尊的立場の産み出した、政治臭のプンプンすることばなのである」（熊谷公男 2001、23 頁）という立場から、「4 世紀以降の倭王権の半島進出と多数の倭人の渡航は、半島南部の支配のためではなく、半島側の要請にもとづく軍事援助や、その見返りとして供給されるヒトとモノの独占掌握のためであったととらえなおすべきであろう」（同 30 頁）という。そもそも 4 世紀後半から 5 世紀にかけてカラからヤマトへ流入・血肉化し定着した文物はあっても、その逆の関係は皆無に等しい一方通行なのだから、「私には、この、列島の人々の心に芽ばえたカラへの熱い思いこそが、倭王権の「任那」への執着を根底でささえていたように思えてならない」（同 61 頁）というのである。いや、カラへの熱い思いとは渡来人の「故地」へのものだったかもしれない。

彼のこの発言は次のような思想に基づく。「古代、半島から列島には断続的にたくさんの人々が渡来し、列島の住民となった。かれら渡来人（帰化人）が歴史上はたした役割は、想像以上のものであった。…この関（晃）氏のことばは、もう 40 年以上もまえのものであるが、「帰化人はわれわれの祖先」、「彼らのした仕事は、…日本人がしたこと」ということばなどはまさに至言であって、読むものにいまだに新鮮な感動をあたえてくれる。このような開かれた精神とくらべると、戦前に声高に唱えられた“大和民族の純潔性”などというスローガンが、いかに偏狭な、誤った歴史認識にもとづく排外主義のイデオロギーであったかがよくわかるであろう」（同 48-49 頁）。

次に吉川弘文館版『日本の時代史』（2002 年）を見てみよう。このシリーズは各巻複数の著者たちによって構成されており、それぞれの史観の相違が統一されていないが、いずれも近年の韓国考古学の知見を取り入れているのが目立つ。

第1巻「倭国誕生」で同名の冒頭論文を書いている吉川太一郎は、「弥生文化とは、縄文人がこうした新来の人々とその文化を取り込むことによって作りだした新しい文化にほかならない」（吉川太一郎 2002、31 頁）と述べて、縄文人の主体性に力点を置くが、他方で、設楽博己「農業の始まりと地域文化の形成」では、弥生文化は、朝鮮半島での米と雑穀を組み合わせた「網羅的生業体系」と米主体の「選択的生業体系」が、日本列島の水田稲作成立当初から見られることから、「弥生文化形成に大きな役割を演じた大陸系の文化要素は朝鮮半島南部から導入されたことが早くから説かれており、それは現在でも変更する必要はない」（設楽博己 2002、173-174 頁）と結論づけている。またその論理に基づき、縄文文化の弥生文化への自生発展説が論拠の一つとする夜臼式土器（＝突帯文土器＝縄文土器とされている）への靱痕付着に関して、突帯文土器は果たして縄文土器と言えるのか、むしろ朝鮮半島無文土器の系譜を引くのではな

いか、と疑問を呈している。

設楽はさらに朝鮮半島からの直接の影響下にあった九州から西日本の弥生文化と比較して、中部・東日本における土器・石器あるいは墓制・葬制に残る縄文文化（「縄文系弥生文化」）と弥生文化の共存などから、弥生文化の東への伝播の多様なあり方を論じている。

また中橋孝博「倭人の形成」は、縄文人と弥生人の骨の比較分析から、弥生文化渡来説に立つ。縄文文化の弥生文化への自生発展説が論拠とする主要な材料の一つが、弥生文化に属する支石墓から縄文文化の特徴である抜歯風習を示す頭骨が発見されたことにあるが、中橋は、中国江淮地域での弥生時代に近い時期の資料に抜歯習慣が見て取れること、さらに将来そうした資料が朝鮮半島からも出土する可能性を示唆して、抜歯習慣＝縄文文化という定式を相対化している。それと同時に、彼は朝鮮半島由来の「支石墓」の方を重視し、「他の文化要素とは違って葬制は伝統的色彩の濃いもの」（中橋孝博 2002、304 頁）だから、被葬者は渡来人と見なすべしと述べる。その上で、九州北部で出土する多数の人骨のうち、縄文人的特徴を示すのは10～20%に過ぎないのであって、「水稻耕作を柱とする弥生文化の形成を担ったのが縄文系の人々であるなら、2～300年後の同地域に、形質の大きく異なる渡来系の人々が大多数を占めるような社会が出現することは説明困難であろう」（同 305 頁）と結論づけている。

さらに第2巻では、田中史生は「渡来人と王権・地域」において、5世紀の倭の技術革新時代に、急増する渡来人が大きく貢献し、単に北部九州、畿内（葛城氏）だけでなく、吉備、紀伊などの首長も畿内倭王圏と接近を強めながらも、自らの拠点に渡来人を呼び込んだという。また6世紀前半の倭と百済の関係を軸とする日本列島と朝鮮半島の交流（戦争も含む）に、渡来人が果たした役割を明らかにした（田中史生 2002）。

総じてこの『日本の時代史』は、日本列島と朝鮮半島との関係に、意識的に取り組み、朝鮮半島の考古学調査の成果をかなり取り入れていながら、ほとんど「任那」について言及することがない。たとえば、吉井秀夫「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」では、韓国で出土される「甲冑類は、5世紀の日本列島で多く出土することから、日本人研究者の多くは、これらを日本列島から持ち込まれたとみている。ところが、福泉洞古墳群と大成洞古墳群の調査で、4世紀代の短甲類が多く発見されたこともあって、先にあげた甲冑類が日本列島で製作されたことを疑問視する説も出されている」（吉井秀夫 2002、182 頁）という見解が提示されている。これは一例だが、彼の論文は、韓国考古学の近年の急速な進展が、日本の考古学や古代史研究に再考を促す可能性を示唆している。

ここでわが土生田所員にも触れておきたい。土生田所員のこれまで長年の古墳研究は、古墳の特徴の推移をたどり、その時期の権力構造について、弥生時代における威信財の配布ネットワーク（三角縁神獣鏡の同範鏡の分布網の分析）による首長連合の時代から、1) 威信財分与に

よる関係構築を必要としないほどの権力形成、2) 王墓周辺に築造された「陪塚」(ばいちょう)から推測される王権をとりまく政治機構の整備、3) そしてそれまで移動していた首長墓築造地の固定化および陪塚がなくなることから、より一層の王権の確立が推定できること、こうして古墳時代とは、7世紀後半における「国家」成立期の前段階＝形成期として把握するところにあった。もちろん彼の研究は、さらに横穴式石室の研究や、現代の日本と韓国における古墳調査結果を踏まえた、古代の日本列島と朝鮮半島の交流についての考察など、幅広い(土生田純之 2006、2011)。

彼の主著 2006年の『古墳時代の政治と社会』(吉川弘文館)は二部構成になっていて、第一部の中に「朝鮮半島の前方後円墳」を配し、第二部は「渡来人と古墳」と題して、古代における日本列島と朝鮮半島の関係を重視した構成になっている。その彼の視座は次のようなものである。彼は言う、近年、韓国全羅道で前方後円墳の存在が明らかになった。だが、日本列島に起源を有する前方後円墳が全羅道で発見されたことをもって、「かつての全羅道は列島の版図に入ることになりはしないか。もし上のように考えている人がいるとすればそれは大変不幸なことだ、といわざるをえない。昔、日本がおかした植民地支配という間違いを踏まえて慎重になるのは当然だろう」(土生田 2006、254頁)。同感である。この視点を前提とした彼の本書の特色の一つは、「文化の伝播に関して、文化は決して水のように高いところから低いところに一方的に流れるものではない。人の交流のあるところ必ず双方向的な流れが認められるはず」(同 273頁)だから、弥生時代から古墳時代の日本列島と朝鮮半島の頻繁な交流関係をこそ考察すべきだと考えるところにあると思う。彼の仕事も 1970年代以降の古代史観の変化の潮流に属すると言ってよいだろう。

現代の日本古代史像の退行

では最近の日本における古代史観はどうであろうか。ここで材料とするのは 2010～2011年の岩波新書「シリーズ日本古代史」(①～③)と、2013年版『岩波講座 日本歴史』である。その執筆者たちの中には、これは金達寿や鈴木武樹らが一役買ったであろう日本列島の古代史像の、私からするとまっとうな変化から、いま退行を始めているように見える。

まずシリーズ①の石川日出志『農耕社会の成立』の弥生文化論を見てみよう。彼が「地域ごと、時期ごとの文化的差異や変化が大きいのは、縄文伝統／新来の大陸系要素／弥生独自の要素の複合が地域ごとに差異があり、各地で刻々と変貌を遂げていったから、というのが実態なのではないだろうか」(石川日出志 2010、87頁)という視点で、単に弥生文化＝稲作という図式ではないという、たとえば前述の設楽博己らの新たな見解と歩を一にしているのはよい。た

だし石川の場合、それは北九州を入り口とする西日本への大量の渡来人による、中部・東日本への伝播の多様性ということの意味するのではない。

彼によれば、「弥生式文化人は大陸から海を越えてやってきた人々」という考えは、縄文文化と弥生文化の人びとはそれぞれ異なる民族集団—先住民／渡来人—の文化だという、明治・大正年間に生まれた考え方が前提になっている」（同 82 頁）のであって、新しい考え方は「日本列島在来の人びとが順次大陸からさまざまな技術と文化要素を取り入れて、私たちが「弥生」と冠する時代・文化をつくり出していったと考える場合が多い」（85 頁）。これが彼のスタンスである。その論拠として「1980 年代になって玄界灘沿岸の福岡県糸島市新町遺跡で、大陸系墓制である支石墓から弥生早期の人骨が出土したことで新たな問題が出てきた。なんと新町遺跡の人骨は縄文的な形質と抜歯風習をもつ事例だったのである。そのために、考古学側では、やはり縄文から弥生への変革は縄文系の在来集団が主体となってなされたという見方が出され」（同 86 頁）た、という。彼の文は意図的である。この事例は彼が「なんと」と形容するほどもはや「新たな問題」ではなく、前述の中橋孝博論文によって、その「形質と抜歯風習」を縄文文化とする視点そのものはすでに相対化されているのである。

こうして彼は、「弥生式文化人は大陸から海を越えてやってきた人々」だというのは、「戦前から戦後に引き継がれた定説」（同 82、86 頁）なのだと、繰り返すが、本当にそうなのか。その「定説」には朝鮮侵略に貢献した日鮮同祖論も含んでいるのであり、戦後になって渡来人の影響をほとんど無視した日本の古代史に異議を唱え、やっと渡来人の影響を正當に評価してきた議論を、戦前の「定説」とやらにつなげてしまっただけは身もふたもないではないか。石川のこの意図的な議論でいくと、新しい見解は、原日本人が渡来人を受け入れた、ということになる。これは私の感覚ではむしろ戦後における「古い」見解だと思うのだが。

シリーズ②吉村武彦『ヤマト王権』はどうだろう。彼は 4、5 世紀の倭と朝鮮半島との関係について、広開土王碑文と『三国史記』百濟本記から、「倭国が百濟・新羅を「臣民」にしたことは、まちがいなかろう」（吉村武彦 2010、70 頁）と言い、「高句麗広開土王の領土拡大への勲績を拡大評価する傾向が想定されるにせよ、倭の進出を否定することは不可能である」（同 70 頁）と断言している。吉村はヤマト王権成立を 4 世紀前半と想定し、それはヤマトを中心とする近畿地方の一部であり、しかも必ずしも政治的に安定していなかったとしているが、そのわずか 40～50 年後の 4 世紀末から 5 世紀初めに、百濟・新羅を支配できたのだろうか？

シリーズ③吉川真司『飛鳥の都』では、7 世紀の倭国の対外関係と国内の変動について論じている。その場合、『日本書紀』に依拠するのだが、彼によれば、近年の木簡の出土と解説により『日本書紀』の信頼性は揺らぐどころか、かえって回復してきている。これまでの『日本書紀』批判と七世紀史の再構成は行き過ぎではなかったか」（吉川真司 2011、vi 頁）、という立場

である。それゆえ 600 年の新羅との任那をめぐる戦争を『日本書紀』に従って、倭が新羅を攻撃し、5つの城を攻め落とし、新羅が和を乞うてきたので、新羅・任那から毎年「調」（貢納物）を奉ることで決着したという経緯を紹介した上で、「戦闘の事実があったと考えてよい」（同 18 頁）と結論づけている。

次に 2013、14 年公刊の『岩波講座 日本歴史』を見てみよう。このシリーズ執筆陣には、吉川弘文館『日本の時代史』に執筆した設楽博己、田中史生（すでに紹介済み）、あるいは李成市が加わっており、また岩波新書シリーズ日本古代史③『飛鳥の都』著者吉川真司もいる。設楽、田中両氏は本稿で積極的に評価しており、それゆえ古代の日本列島と朝鮮半島との関係に関する一定の歴史観を、本『講座』の数多くの執筆者すべてから照らし出すことは難しい。ここでは 1970～2000 年頃のあいだ、それ以前に比べ私の目からは良い方向に変化してきた史観から、今や退行が目立ち始めたと思われるいくつかの論考を選び取るにとどめたい。

同『講座』第 1 巻に岩永省三「東アジアにおける弥生文化」がある。岩永は弥生早期に稲作やそれに関わる文物習俗が朝鮮半島南部から入ってきたことをまずは認める。以下、引用が長くなるが後段への必要上、あえて行う。「縄文時代から弥生時代への移行期の北部九州で、稲作農耕に関わる各種文物など朝鮮半島南部と共通することから裏付けられる。具体的には、縄文後期末から米とそれに関する情報がもたらされ、晩期中庸には孔列文土器の手法や石包丁、弥生早期には水田、住居形態（松菊里型）、環濠集落、石器（農具・工具）、土器（壺）などの渡来的要素が出現したほか、精神文化にも大転換があり、墓（支石墓）、副葬用磨製石器（石鏃・石剣）、葬送習俗（埋葬姿勢など）、抜歯風習にも渡来系のものが導入された。しかし朝鮮半島南部と北部九州の文化が最も類似するこの時期でも、朝鮮半島系の無文土器文化の遺物・遺構だけで構成される遺跡はなく、朝鮮製・朝鮮系の遺物も少なく、無文土器文化そのものにも変わったわけではない。農耕文化と不可分に複合した収穫具・工具・祭具など、縄文文化にないものを選択的・段階的に導入したものの、同一機能を有するものが存在する場合には導入しなかったことからみて、縄文文化の在来伝統と規制が健全に（下線筆者）働いていた中で、なかったものだけ導入したことが「文化の連続性」をもたらした原因である」（岩永省三 2013、111 頁）という。彼はこうして弥生時代に朝鮮半島からの大量の渡来があったことを否定する。しかし、「縄文文化の在来伝統と規制が健全に働いていた」とはどういう意味か。大量の渡来の影響は「不健全」なのか。

岩永はそう考えているらしく、「渡来的形質の拡散は、縄文人と渡来人の混血集団が、他地域の縄文人の後裔と混血する形でなされ、渡来・混血集団の人口増が縄文的生業に留まった集団のそれを大きく上回り、弥生時代に入ってから汎西日本的に急激に人口が増加したとみれば、大量の渡来人を想定する必要がなくなる」（同 110 頁、下線筆者）というのだ。つまり少数の渡

来人が来て、彼らが在来人と混血し、今度はその人々が他地域でまた混血して、渡来的形質が広がったというわけだが、この論理(?)は遺伝学的に大丈夫なのか。

さらに渡来人は少数であったと想定する「必要」のある彼にとって、この「渡来人の受け入れと混血が速やかに進んだのは、渡来人・縄文人双方が排他性の希薄な双系的社会であったから」(同 112 頁)であり、このように双方ともすぐに仲良くなった風景とはどんなものか。いわく、「縄文時代にもともと人口が少なかった福岡平野を中心とした北部九州に、それほど多くない渡来人(若年～青年層主体、男女はほぼ同数)が散発的にやって来たので、スムーズに縄文人社会に受け入れられ混血が進んだが、文化規範を取り仕切ったのは縄文人の熟年(40-60歳)・老年(60歳以上)層だったので、在来文化の規範が優先され、渡来人とその混血の子供たちも在来文化の規範にそって石器や土器を作った」(同 111-112 頁)。この風景を私なりに「翻訳」するところである。“朝鮮半島から北部九州に若い男女が先進文物・技術をお土産に携えて、ぼつぼつ散発的にやって来て、縄文村落の長老たちに「初めまして、よろしく」と挨拶し、長老たちは「村に住んでいいよ、だけど我々の掟は守ってもらう」と答える。こうして受け入れられた渡来の男女は、その村に溶け込んで、在来村落の男女と結婚して混血が生まれた……”。しかし在来文化規範を重んずるはずの縄文人の熟年・老年は、支石墓や葬送習俗まで新参者のものを受け入れるほど寛容だったのだろうか。そもそもこの論文(?)、古代史の専門家から見てもどうなのだろう。専門家たちの意見を聞いてみたいものである。

次に注目したいのは同『講座』第2巻、丸山裕美子「帰化人と古代国家・文化の形成」である。彼女は「渡来人」とは、「日本の歴史学界で使用される学術用語である。「帰化人」の語に、民族差別の視点があるとして、1970年代から「帰化人」にかわって使用されるようになった。民族差別とは、戦前の日本の中国や朝鮮に対する支配の正当化に「帰化人史観」が用いられていたとする批判である。「帰化」の語に異民族に対する差別意識があることは確かであるが、それもまた歴史的な事象であって、むしろ「帰化人」を単純に「渡来人」に置き換えて免罪符とすることの方が問題のようにも感じる」(丸山裕美子 2014, 111 頁)と言い、自らは「「帰化人」の語を、自らの意志で渡来し定住した人々を中心とし、結果的に定住した人々も含め、王権あるいは国家がこれを受け入れた人や集団とその子孫に対して使用し、倭国の時代まで遡らせて用いることにする」(同 113 頁)と定義する。

それでは日本列島にまだ国家のなかった時代はどうするのかという疑問はさておき、彼女自身、「帰化人」-「渡来人」という用語の歴史は十分に知った上で、渡来人という語を使うのは「免罪符」であるというのは理解できない。上田正昭や金達寿そして鈴木武樹らが帰化人史観に対して苦闘したのは、単にそれが民族差別だからということだけではなく、広く日本の古代史研究の視座そのものに対するものであったはずだ。

丸山は自分も「渡来人」という語を使ってきたが、「今回「帰化人」のタイトルを与えられた」（同 110 頁）ということからして、それが編集委員全体の意向なのだとしたら、一人丸山の論点とのみ解するわけにはいかなくなる。金達寿や鈴木武樹らの問題提起からすでに 30 余年、私には現代の日本史古代研究がまた「プチ・ナショナリズム」に退行しつつあるように思えてならない。

大仙古墳や誉田古墳を歩き、それを築造する巨大な動員力・組織力を見たとき、これまで後進の日本列島から先進の朝鮮半島への「侵略」などあり得ないと思っていたイメージが少し変わった。「侵略」は論外だが、「出兵」はありえた、と。ただし、「先進種族に対するバルバロイの侵入」（吉田晶 1975）として。しかも玄界灘は弥生時代からそれほど往来の大障害ではなかったのだから。さらに、2013 年版『岩波講座 日本歴史 1』の中で、私の胸にストーンと落ちることを菱田哲郎が言っている。4 世紀から 5 世紀にかけて、倭にとって兵力が「交換財」だったというのである（菱田哲郎 2013、219 頁）。ヨーロッパでも古代エジプト王国におけるギリシャ傭兵、古代ローマのゲルマン人傭兵など、後進地域にとって兵力は「交換財」たりえた。しかし 4、5 世紀にヤマト政権があったとして、兵力を送ったのは、他の地方豪族勢力のクニグニでもあったろう。ではなぜそうした地域連合の協力が可能だったのだろうか。ここで私の想像を許してもらおうと、弥生時代以来、古墳時代にも多数の渡来人が朝鮮半島から渡って各地で定住しているとすれば、彼らの故地（朝鮮半島各地域）の記憶が鮮明な時代に、その故地で動乱が起きているとき、権力者の意図はどうあれ、彼らは容易に兵力動員に呼応しえた、のではないか。彼らにとっては故地の救援として。古代史研究者たちが史料と史料の間に働かせている「想像」の中に、私のこのような想像は、発見できなかった。

参考文献

- 石川日出志 2010 『農耕社会の成立』（岩波新書シリーズ日本古代史①）
- 李 進熙 1972 『広開土王陵碑の研究』（吉川弘文館）
- 1974 『好太王碑の謎 日本古代史を書きかえる』（吉川弘文館）
- 井上秀雄 1972 『古代朝鮮』（講談社、引用は講談社学術文庫 2004 年より）
- 井上光貞 1960 『日本国家の起源』（岩波書店）
- 1965 『日本歴史 1 神話から歴史へ』（中央公論社）
- 1978 「古代沖の島の祭祀」（岩波現代文庫『天皇と古代王権』2000 年）
- 岩永省三 2013 「東アジアにおける弥生文化」（2013 年版『岩波講座 日本歴史 1』）
- 上田正昭 1965 『帰化人 古代国家の成立をめぐる』（中公新書）
- 1981 『古代史のいぶき 日本文化の源流を探る』（PHP 研究所）

- 2013 『渡来の古代史 国のかたちをつくったのは誰か』（角川選書）
- 岡村道雄 2002 『縄文の生活誌』（『日本の歴史 1』講談社）
- 梶村秀樹 1977 『朝鮮史—その展開』（講談社）
- 金 達寿 1970—1991 『日本の中の朝鮮文化』第 1 巻～12 巻、講談社
- 熊谷公男 2001 『大王から天皇へ』（『日本の歴史 3』講談社）
- 小林行雄 1962 「古墳文化の形成」（『岩波講座 日本歴史 1』、岩波書店）
- 近藤義郎 1962 「弥生文化論」（『岩波講座 日本歴史 1』、岩波書店）
- 佐原 真 1975 「農業の開始と階級社会の形成」（1975 年版『岩波講座 日本歴史 1』）
- 設楽博己 2002 「農業の始まりと地域文化の形成」（『日本の時代史 1 倭国誕生』吉川弘文館）
- 鈴木武樹 1975 『偽られた大王の系譜』（秋田書店）
- 1976-1 「概説・古代の朝鮮と日本」（『現代のエスプリ』107 号）
- 1976-2 「加羅・任那と天皇族神話」（『現代のエスプリ』107 号）
- 1976-3 『消された「帰化人」たち』（講談社）
- 1977 『古代史の魅惑と危険』（亜紀書房）
- 田中史生 2002 「渡来人と王権・地域」（『日本の時代史 2 倭国と東アジア』吉川弘文館）
- 寺沢薫 2000 『王権誕生』（『日本の歴史 2』講談社）
- 直木孝次郎 1962 『日本の歴史 2 古代国家の成立』（中央公論社）
- 1965 「国家の成立」（1965 年版『岩波講座 日本歴史 1』）
- 1975 「原始・古代史序説」（1975 年版『岩波講座 日本歴史 1』岩波書店）
- 中橋孝博 2002 「倭人の形成」（『日本の時代史 1 倭国誕生』吉川弘文館）
- 原田三朗 1977 「武樹・古代史・東アジアの古代文化を考える会」（『古代史の魅惑と危険』）
- 土生田純之 2006 『古墳時代の政治と社会』（吉川弘文館）
- 2011 『古墳』（吉川弘文館）
- 菱田哲郎 2013 「古墳時代の社会と豪族」（2013 年版『岩波講座 日本歴史 1』）
- 平野邦雄 1975 「ヤマト王権と朝鮮」（1975 年版『岩波講座 日本歴史 1』）
- 藤間生大 1962 「四、五世紀の東アジアと日本」（1962 年版『岩波講座 日本歴史 1』）
- 丸山裕美子 2014 「帰化人と古代国家・文化の形成」（2013 年版『岩波講座 日本歴史 2』）
- 吉井秀夫 2002 「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」（『日本の時代史 2 倭国と東アジア』吉川弘文館）
- 吉川真司 2011 『飛鳥の都』（岩波新書シリーズ日本古代史③）
- 吉川太一郎 2002 「倭国誕生」（『日本の時代史 1 倭国誕生』吉川弘文館）
- 吉田 晶 1975 「古代国家の形成」（1975 年版『岩波講座 日本歴史 2』）
- 吉村武彦 2010 『ヤマト王権』（岩波新書シリーズ日本古代史②）